

序にかえて

受容体は長らく生理学、薬理学の中心的課題でした。とくに薬理学においては、それが目指すすべてに近かったともいえるでしょう。1983 年の故沼教授らのグループによるアセチルコリンのニコチン様受容体 cDNA クローニングの成功は、受容体研究の様相を一変させました。それ以降、分子生物学的手法の導入はこの領域では当然のこととなり、次々と新しいサブタイプが明らかになってきました。たとえば Trends in Pharmacological Science (TIPS) の毎年の特集号の Receptor & Ion Channel Nomenclature Supplement の 1991 年版では Receptor のみで 26 ページだったのが、1996 年版では 63 ページになっていたことから見ても、この領域の進歩がいかにすごいかがわかります。限られた領域の専門家以外は、その領域の進歩についていくことはできません。

『生体の科学』編集部では、この領域でもっとも進んだ研究をされている皆様にお願ひして、各受容体についての最近の進歩をお書きいただき、毎年出しております倍大特集号としてまとめて、いろいろな領域の研究者、学生の方々に役立てたいと考えました。不思議なことに、最近はこのような企画は国内外出ておりませんし、上記の TIPS では限られた範囲を分類しているに過ぎません。1989 年にわが国でも『日本臨牀』から受容体についての大きな特集が出ましたが、少し早すぎて、受容体の大きな進歩はむしろその後が続きました。このような時期に本特集を出すことは医学・生物学領域に与えるインパクトは大きく、きわめて意義あるものと考えます。

編 集 委 員